

## 教える・教えない、モビリティサッカーをめざして

…CSスペシャルサッカー講座から

報告：池谷 孝（指導者養成委員長・清水エスパルス）

- テーマ:オシム監督から学んだことを軸としたサッカー論
- 講師:茶野隆行さん(ジュビロ磐田普及推進グループ)
- 報告対象者:サッカー講座参加者、2種3種4種女子指導者
- 目的:茶野さんの講座からCS指導者各人の気付きを刺激し指導の考え方のクオリティアップを促す。



### ■気付き・想起 (awareness, inspired)

1. チームを作る team building 《…考えさせ、走らせ、リスクにチャレンジさせながら、随時選手のプレーを評価し指導者の脳中のサッカー感(観)を明快に伝えていく作業…》

茶野さんの、オシム監督のサッカー指導にまつわる話のところで一番感じたことは、オシム監督はオシム監督の「サッカー感を伝える切るため」に自身の哲学や考え方、経験値、分析力、指導法を総動員して指導したということです。チームを構築するということが、自身が信じる明快なサッカー感を伝えることであるということは当然なことではありますが、オシム語録とはまた違った、プロ選手を指導するプロコーチとしての本質を感じさせるものでした。また、明快な、確固たるサッカーに行きつくまでの監督がサッカーを観た時間の膨大な量にも思いを馳せました。ペニテスが、3試合入った 1,500 本のビデオを見つけたという話を思い出しました。

オシムさんは、聞くところによると数学の才能に秀でていて大学の教授にもなれたであろうということでありますから、数理的な合理性と洞察力をもってサッカーを読み、高質で独自のサッカー哲学、サッカー感を構築してきたと推察できます。その思考の合理性や妥当性は、すぐれた指導力となってユーゴやオーストリアでの成功につながったのであろうことは事実が証明しています。

「選手の主張を認めない」「リスクを冒さなければ何も起こらない、と正しいリスクの冒し方を厳しく指導し続けたこと」「トレーニングはすべてゲームリアリティに従ったもの」「ゲーム形式主体で基本トレーニングや自主トレはなし」「同数でないゲーム」「レギュラーを固定せずリーグを戦う」「チーム作りの初期の段階にピブスを多用して、見て、考えて、動き、サッカーをプレーすることを植え付けた」というようなことは、すべてイヴィチャ・オシムのサッカー感を植え付けオシムさんが信じるオシムサッカーをやらうとしたということです。考え、走り、リスクを冒しながらチャレンジする選手のサッカーを個人別にかつ個別の状況で、シンクロ、フリーズの手法を使いながら手厳しく評価し指導する先に自分の信じるサッカーがあるということだと理解しました。このことは育成年代を指導する指導者にとっても多くの示唆を与えてくれるものです。

しかしながら、「メッシでもロナウドでも自分のサッカー感に共鳴しない者は使わないでしょう」という、私の質問に対する茶野さんの見解が示すプロ監督の方法論は、育成年代の指導者にはやや無理があるようにも思います。

育成年代の指導をする者は、明快なサッカー感を持ちトレーニングやゲームでの技術や局面の指導と、サッカー全体をとらえる明晰な視点で、選手のサッカーのレベルやサッカー感(イメージの質)まで降りて行き、寄り添い、そこから指導者のサッカー感まで引き上げる作業が必要であるように思います。そこには当然、選手のことを知る努力や双方向の対話、傾聴、相互承認などの育成手法が必要で、勿論選手のサッカーより指導者のサッカーが高いレベルであることも求められると思います。お互いを理解ながら、選手のアイディアや考える力を引き出す指導、問題解決力を引き出す指導者の指導がヒントになると思います。

### 2. Mobility Football

話がそれますが、オシム監督の目指すサッカーのキーワードのひとつにモビリティという言葉があったと思います。流動的、機動的でスピード感がある連動したサッカーとでもいいでしょうか。あるいは、人とボールがテ

ンボよくスムーズにミスなく動き、スピーディかつ効果的にゴールを襲うサッカーというように私は解釈します。ゲームに必要な技術を、効果的なトレーニングと繰り返しの指導で習得させながら、それぞれの指導者が「モビリティ」を生み出す指導に今一層チャレンジすると静岡県のサッカーやそれぞれのゲームにも変化と膨らみが出てくるように思います。

### 3. 教える指導、教えない指導

選手の問題解決力を導き出すには、パーフェクトスキルの獲得という基盤があって可能になるともいえませんので、育成年代は技術を教え込むという作業が必要不可欠な条件として入るはずで、技術を教えながら (teaching)、考える力、決断力を身に付けさせ (coaching)、さらに、効果的に動く、惜しみなく動く、より速く動く、より速くプレーする。より正確に、よりサッカーのスピードを上げてゴールに向かうことを促すことによって選手のサッカーは向上していくのだと感じました。これらは過日研修したロッテルダム・フェイエノールトでの選手育成のメソッドの中に見つけたことと私の中でつながります。

日本の育成年代の選手に対しては、年齢や習熟度を考慮してバランスをとる必要がありますが、技術を教え込む指導、選手の考えを引き出す指導いずれも選手のゲームでの問題解決力を高めることにつながると思います。

オシムさんのサッカー感のさらに先には、オシムさんのサッカー感を超える選手のプレー、チームのサッカーがあったように想像します。その到達点はイノベーションの連続で無限界なのでしょうけれど、茶野さんの講座を聞いて、指導者のサッカーを超える選手の育成というのは、育成のひとつの大きな到達点であると気づかされました。これは私の中で、野村克也のいう「組織は監督の器以上にならない」、平井伯昌のいう「指導者の限界が選手の限界になってはいけない」、中竹竜二のいう「監督を頼るな」という矛盾するようでいて実は本質的な言葉とつながるものでした。

また、しばらく前のテレビで岡田武史さんの特集番組を見ました。私のシンプルな理解はこうです (乱暴ですが)。横浜F・マリノス時代では教える指導で成果が出たが、その指導法にだんだん物足りなくなって懐疑的になり中国緑城を指導する今では選手自身の考えや解決力を引き出すコーチング的指導をしている。しかし、それだけでは不足を感じて時々教え込んでしまうことがある、というようなものだったと思います。

私はその番組を見て、教える指導と教えない指導のその先にある指導というものが何となく見えたようにも思いました。指導法はどっちが正しいという比較論では解決しない、選手のクオリティを見ながら行ったり来たり、どちらも欠けてはいけないと思いました。また、2006年のジーコさんは、選手自身の自発的思考に重きを置くという意味では型なし、2002年のトルシエは教え込むという意味で型ありと見ましたが、型なし、型あり、型破り、その先にあるものは何でしょうか。

### 4. メソッドの構築とカタログ化

いずれにせよ、自分の指導メソッドを構築しカタログ化して向上させる努力を続けることがその先につながると考えます。あるべき姿 (目標) を追う発想と現実的なことを解決していく発想、ゲームからトレーニングを考える発想、トレーニングで問題を解決しながらゲームに向かう発想、つまり逆算と積算の発想の両方の視点で選手育成、チーム作りをとらえ、自分の指導法 (メソッド) の確立の階段をあげることを勧めたいと思います。

#### ■ 茶野さんのお話のトピックス

- ・楽しくないならサッカーではない…やらされてやるならやらないほうがいい。
  - ・自分の体に責任を持つ…体のケアをする。怪我をしないこと (無事これ名馬)、
  - ・コンディショニング…専門家の力を借りる。
  - ・守備について (茶野流) …自分の間合い、相手のタイプに合わせたポジション取り、駆け引き・スル賢さ、ボールと相手が見える、相手に常にコンタクトしている。
  - ・すぐれたFW (茶野流) …視野から消えて出てくる。
  - ・TRのサンプル…4色のピブスの味方、2人の守備者による4対2…見る、考える、動く。
- ①パスを渡せる順番が決まっている。②いくつかのオプション。